

令和元年6月18日現在

機関番号：34302

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K17320

研究課題名(和文)他者との学習における動機づけ調整プロセスの解明

研究課題名(英文)The process of motivation regulation in cooperative learning

研究代表者

梅本 貴豊 (Umemoto, Takatoyo)

京都外国語大学・外国語学部・講師

研究者番号：50742798

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：この研究では、大学生を対象に、他者との学習における動機づけ調整プロセスを解明することを目的とした。まず、他者との学習場面に特化した動機づけ調整方略を測定する尺度を開発した。そして、テスト学習、プレゼン準備といった協同場面において動機づけ調整方略と学習行動との関連が異なることが示された。そして、協同学習を観察して発話を分析したところ、動機づけ調整傾向の高い学習者は、協同学習中に自ら話題を変えるなどにより、動機づけ調整を行っていることが示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまで、他者との学習場面に特化した動機づけ調整プロセスの検討は見られなかった。本研究によって、他者との学習における具体的な動機づけ調整方略と、それらがどのように学習行動に関連するのかが明らかにされた。また、そういった関連が具体的な協同場面によって異なることも示された。さらに、観察および発話分析による、協同学習中の状況的な動機づけ調整についても検討を行った。これらの知見は、個人学習場面での検討に終始してきた動機づけ調整研究の発展に寄与し、また、自己調整学習研究の視野を広げるものである。さらに、アクティブ・ラーニングが強調される昨今において、他者との学習における支援に貢献しうるものである。

研究成果の概要(英文)：This study examined the process of motivation regulation in cooperative learning in undergraduates. First, a scale for measuring motivational regulation strategies in cooperative learning was developed. Second, we found that the relationships between these strategies and learning behaviors differed in cooperative learning settings such as preparation for the next examination and for presentation in a small group. Next, the analysis of learners' utterances during cooperative learning showed that learners who had a high tendency of motivation regulation were regulating their own motivation by changing topics by oneself during cooperative learning.

研究分野：教育心理学

キーワード：動機づけ調整 協同学習 エンゲージメント 自己調整学習 大学生

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

学習を進める際に、常に意欲的であることは難しい。そのため、自分自身で効果的にやる気を調整するという視点が重要になる。自律的な学習プロセスを明らかにしようとする自己調整学習の分野では、そういったやる気の調整を「動機づけ調整」と呼び、研究が行われている (Zimmerman & Schunk, 2011)。例えば、Wolters (1999)、伊藤・新藤 (2003)、Umamoto (2015) は、大学生や中学生が用いる動機づけ調整方略 (例えば、学習内容と自分の興味のあることを関連づけてやる気を高める、静かな場所に移動するなど学習環境を変えることでやる気を高める) を明らかにし、それらがどのように学習に影響するのかを検討している。

さて、近年、教育現場においてアクティブ・ラーニングを推進していくことが強調され (中央教育審議会, 2012)、他者と協同的に学習することが重要視されている。自己調整学習分野においても、従来の「個人の学習や熟達・成長」だけではなく、「協同場面における他者との学習の調整」に焦点を当てた社会的に共有された調整学習 (Hadwin et al., 2011) が注目されているが、実証的な研究は少ない。すなわち、アクティブ・ラーニングが強調される今日、他者といかに協同して行動を調整しながら効果的に学習を進めていくのかといった「他者が関わる学習のプロセス」を明らかにし、学習支援につなげることが求められている。

他者と学習する際にも、やる気が低下することは考えられるため、積極的に学習を続けていくためには、やはり効果的に動機づけを調整することが重要である。しかしながら、これまでの動機づけ調整研究は文脈や状況を特定せずに一般的な独りでの学習場面のみを扱っており (e.g., Schwinger et al., 2009)、「他者との学習における動機づけ調整」については実証的な研究が行われていない。これに関して伊藤 (2012) は、これまでの学習研究は、学習一般場面を扱っており、学習者を支援するためには、より文脈や状況に根差した学習プロセスの検討が必要であるとしている。つまり、動機づけ調整研究においても、文脈や課題を特定した上での検討や、学習中のダイナミックで状況に根差した学習の調整過程についても焦点を当てていくことが必要とされている。

2. 研究の目的

本研究では、他者との学習場面、すなわち協同学習における動機づけ調整プロセスを明らかにすることを目的とする。具体的には、3年間で以下の3つの観点について検討する。

(1) 1年目の研究では、「学習者は他者との学習においてどのように動機づけを調整しているのか (動機づけ調整方略) を明らかにする」ことを目的とする。

(2) 2年目の研究では、「どのような文脈・課題において、どのような動機づけ調整方略が積極的な学習行動につながるのかを明らかにする」ことを目的とする。

(3) 3年目の研究では、実際の他者との学習場面における、よりダイナミックで状況に根差した動機づけ調整方略と学習行動・結果との関連を明らかにする」ことを目的とする。

3. 研究の方法

本研究では、大学生を対象に、他者との学習における動機づけ調整プロセスを解明するために、3つの研究を実施する。特に、量的データと質的データを用いることで、大学生の他者との学習における動機づけ調整プロセスを精緻に検討する。

(1) 1年目の研究ではまず、大学生に対して自由記述による質問紙調査を行う。ここでは具体的に、「友だちと協同的に学習をしていて学習に対するやる気が低下した際、どのようにしてやる気を高めようとしているのか」を自由記述で尋ねる。そして、得られた自由記述をKJ法によってカテゴリに分類し、それらを参考に測定項目を作成する。また、動機づけに関する尺度との関連を通して、構成概念妥当性を確認する。次に、縦断的に2回の質問紙調査を実施し、動機づけ調整方略が学習行動に与える影響について明らかにする。

(2) 2年目の研究では、調査を行い、「友だちと一緒にテスト勉強をしているとき」と「友だちと授業でのプレゼンテーションの準備をしているとき」を想定させた学習文脈・課題において、他者との学習における動機づけ調整方略と学習行動を測定する。1つ目の文脈は、テスト学習のような1つの解に向かって勉強するといった理解や記憶が中心の定型的な課題に取り組む文脈であり、2つ目の文脈は、プレゼンの準備といった比較的自由度が高い非定型的な課題に取り組む文脈である。こういった大きく異なった文脈を用いることで、どういった課題に対してどういった動機づけ調整が有効になるのかといった文脈の効果を検討することができる。

(3) 3年目の研究では、小グループによる協同学習を取り入れた授業を対象としてビデオカメラを用いた観察を行い、さらに協同学習中の発話をICレコーダで録音する。ICレコーダで録音した発話を起こし、ビデオカメラで録画された協同学習中の行動と照らし合わせながら、

より状況的な他者との学習における動機づけ調整方略を明らかにする。さらに、質問紙調査を並行して実施し、動機づけ調整などの自己評価についても測定する。これらにより、実際の協同学習中のどのような場面で、どのような動機づけ調整を行い、それに対して他者がどのような反応をし、それがどのような行動や結果につながったのか、といった状況的でダイナミックな動機づけ調整方略と学習行動・結果との関連を明らかにすることができる。

4. 研究成果

(1) 1年目の1つ目の研究では、協同学習における動機づけ調整方略尺度を作成し、方略と動機づけ要因、エンゲージメントとの関連について検討した。まず、261名の大学生を対象とした自由記述による質問紙調査を行い、動機づけ調整方略尺度の46項目を作成した。次に、284名の大学生を対象とした質問紙調査を行った。因子分析を行った結果、協同学習における5つの動機づけ調整方略（積極的交流方略、課題価値方略、義務感高揚方略、自己報酬方略、学習活動構造化方略）が特定された。それらの動機づけ調整方略と自己効力感、内発的価値との偏相関分析の結果から、尺度の構成概念妥当性が確認された。重回帰分析の結果、行動的エンゲージメントに対して、義務感高揚方略、自己効力感、内発的価値が正の関連を示した。感情的エンゲージメントに対しては、積極的交流方略、学習活動構造化方略、内発的価値が正の関連を、義務感高揚方略が負の関連を示した。

また、1年目の2つ目の研究では、Relative Weight Analysisを用いて動機づけ調整方略が行動的エンゲージメントに与える相対的な重要性について検討を行った。因果関係を明確化するため、協同学習を含む授業を受講する大学生に対して、2回の縦断的な調査を行った。分析の結果、他の4つの動機づけ調整方略に比べて、積極的交流方略が2時点目の行動的エンゲージメントに相対的な重要性を示した。この結果は、自律的な他者との学びを促進するためには、特に積極的交流方略への介入が重要になることを示している。

(2) 2年目の研究では、「テスト学習」と「プレゼン準備」という2つの協同学習場面における動機づけ調整方略とエンゲージメントとの関連について検討を行った。また、2つの場面における動機づけ調整方略の使用差についても検討した。他者とのテスト学習場面を想定させる質問紙と、他者とのプレゼンテーションの準備場面を想定させる質問紙の2パターンを作成し、3つの大学の学生にランダムに配布した。そして、計223名の大学生のデータが分析された。まず、平均値の差の検定の結果、協同学習場面によって、4つの動機づけ調整方略の使用に差があることが示された。次に、重回帰分析の結果、協同学習場面によって、動機づけ調整方略とエンゲージメントとの関連に違いが見られた。特に、プレゼン準備場面において、多くの動機づけ調整方略と、エンゲージメントとの関連が見られた。つまり、特にプレゼン場面において、動機づけ調整は自律的な他者との学びを促すカギになると考えられる。

(3) 3年目の研究では、大学生を対象に、協同学習における動機づけ調整を観察および発話分析、質問紙による調査から検討した。2つの大学のそれぞれの授業における協同学習を対象として調査および観察を行い、28名のデータを分析対象とした。まず、質問紙による調査結果を分析した結果、動機づけ調整傾向の高い学生は、特に協同学習の後半において、安定した動機づけで学習に取り組んでいる可能性が示された。また、自由記述を分析した結果、動機づけ調整傾向の高い学生は、協同学習中により質の高い具体的な動機づけ調整を行っている可能性が示された。また、発話分析から、動機づけ調整傾向の高い学生は、協同学習中に「話題を変えること」や、「自ら意見を出すこと」を通して動機づけを調整している可能性が示された。これにより、より学習の状況に随伴した動機づけ調整について検討することができた。

以上より、大学生の他者との学習における動機づけ調整プロセスの一端を明らかにすることができた。これまでの動機づけ調整研究では、学習一般場面を扱っており、「他者との学習における動機づけ調整」に焦点を当てた研究はほとんどない。本研究は、これまで主に個人内の動機づけ調整過程の検討に止まってきたものを、他者との学習といった個人間での検討に広げようとするものであった。これは、自律的な学習プロセスの解明を目指す自己調整学習および社会的に共有された調整学習研究の発展に資するものである。

また、これまでの動機づけ調整研究は、量的データに頼ったものが多かった(e.g., Umemoto, 2015; Wolters, 1999)。そのため、現状では状況的で詳細な動機づけ調整過程の検討には踏み込めていない。本研究では、協同学習の観察と発話分析を通して、より具体的に文脈に根差した他者との動機づけ調整過程について検討を行った。量的なデータに加えて質的なデータを用いて動機づけ調整過程を照らし出すことで、これまでの研究よりもさらに精緻な検討を行うことができた。

さらに、近年、アクティブ・ラーニングの導入によって仲間との学び合いを行う機会が増えている。つまり、大学生の他者との動機づけ調整プロセスについての検討は、こういった社会的な背景を踏まえた上で、大学生の学習を支援することにも寄与するものである。

今後は、様々な協同学習場面を対象にし、知見を積み重ねていく必要がある。また、学習課題の内容や性質、他のグループメンバーとの関係性など、より多くの要因を考慮してより精緻

に検討を行っていくことも必要である。最後に、動機づけ調整方略と、協同学習中の動機づけの推移についても研究が必要である。特にその場合には、動機づけ調整方略の質的側面と量的側面を分けて検討することが重要である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計4件)

梅本貴豊, 稲垣 勉, 授業中の動機づけ調整方略と動機づけの変動性の関連, 心理学研究, 査読有, 90巻2号, 2019, 印刷中

DOI: doi.org/10.4992/jjpsy.90.18312

梅本貴豊, 田中健史朗, 矢田尚也, 中西良文, 2つの協同学習場面における動機づけ調整方略とエンゲージメントの関連, 三重大学高等教育研究, 査読有, 25巻, 2019, 31-39

梅本貴豊, 田中健史朗, 矢田尚也, 協同学習における動機づけ調整方略と行動的エンゲージメントの関連—Relative Weight Analysisによる検討—, 関西大学高等教育研究, 査読無, 10巻, 2019, 55-63

<https://kuir.jm.kansai-u.ac.jp/dspace/handle/10112/16890>

梅本貴豊, 田中健史朗, 矢田尚也, 協同学習における動機づけ調整方略尺度の作成, 心理学研究, 査読有, 89巻3号, 2018, 292-301

DOI: doi.org/10.4992/jjpsy.89.17217

〔学会発表〕(計8件)

梅本貴豊, 稲垣 勉, 他者との学習における動機づけ調整過程—動機づけの変動性との関連—, 日本教育心理学会第61回総会, 2019年

梅本貴豊, 稲垣 勉, 発話分析による他者との学習における動機づけ調整の検討, 日本教育工学会2019年秋季全国大会, 2019年

梅本貴豊, 田中健史朗, 矢田尚也, 他者との学習における動機づけ調整方略とメタ認知, 日本心理学会第82回大会, 2018年

梅本貴豊, 矢田尚也, 他者との学習における動機づけ調整—2つの協同場面における検討—, 日本教育心理学会第60回総会, 2018年

Umemoto, T., Tanaka, K., Yada, N., Motivational regulation strategies in two cooperative learning situations, the 29th International Congress of Applied Psychology, 2018年

梅本貴豊, 田中健史朗, 矢田尚也, 他者との学習における動機づけ調整方略と行動的エンゲージメントの関連—Relative Weight Analysisによる検討—, 日本教育心理学会第59回総会, 2017年

梅本貴豊, 田中健史朗, 矢田尚也, 他者との学習における動機づけ調整方略尺度の作成, 日本心理学会第81回大会, 2017年

Umemoto, T., Tanaka, K., Yada, N., Motivational regulation strategies in cooperative learning, the 15th European Congress of Psychology, 2017年

〔図書〕(計2件)

梅本貴豊, 北大路書房, 学生を自己調整学習者に育てる—アクティブラーニングのその先へ—(第3章 読む, 見る, 聞くことの自己調整, 第12章 統合されたコースのモデルと学生にもたらす効果), 224 (pp.35-49, pp.161-170)

梅本貴豊, 北大路書房, 自ら学び考える子どもを育てる教育の方法と技術(第8章 自律的な問題解決を促す指導), 2016年, 255 (pp.112-123)

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。